

電八倶楽部「電信八号」インタビュー記録

2002年10月5日

インタビュー対象者：石岡 隆光 氏

伊澤 正之 氏

中村 賢一郎 氏

青木 茂 氏

インタビュー担当者：藤田 英樹・生稲 史彦

インタビューには、石岡氏・青木氏が開始時よりご参加くださり、伊澤氏・中村氏が途中からご参加くださいました。

- ・ 石岡氏に川瀬氏よりソースコード公開の要望
- ・ 「恥ずかしいコード」のため、なかなか公開に踏み切れず
- ・ ただし、利用者側から見れば、「遊び心のある感動的なコード」
- ・ 「電信八号」の改良に関する要望を受け付けながら、それに応えられない「ソースコード死蔵」の状態が続く
- ・ 条件つきでソースコードを公開

石岡氏

- ・ 専門は自然言語処理、テキスト・マイニング
- ・ 以前は機械翻訳などを手がけていたが、現在は日本語解析プログラム及びその周辺技術の開発をしている(例えば、Web上のQ&Aシステムなど)

青木氏

- ・ 東京大学大学院工学系研究科所属

「電信八号」における開発の概要

- ・ コーディング
 - 公式ビルダである中村氏(関東)、福井氏(関西)がコーディングされたパッチを取りまとめる
- ・ 検証、テスト
- ・ 連絡・渉外
 - 伊澤氏が最初担当していたが、後に小川氏、近田氏が加わる

コンパイラを変える それ以前には顕在化していなかったバグが顕在化することがある

< 以下、主に石岡氏に対するインタビュー結果 >

- ・ 当初からフリーウェアとして開発
- ・ 開発動機は「『分かりやすいメールソフト』を自分が使いたい」ことと、若干の「金儲け」
- ・ 思ったよりシェアが取れず、後発の「Becky!」が急速にシェアを伸ばしたことを見て落胆。「金儲け」を断念

- ・ 作者の予想外の使われ方をしていることもある
- ・ 「電信八号」のデータ形式が単純な S-JIS テキストなので、他のソフトウェアでハンドルしやすいからであろう
- ・ 例えば、プログラム・サイズが小さいのでフロッピー・ディスクに保存して携帯するなど
- ・ 作者が考える「ここがよいだろう」という利点(作者側から見たセールス・ポイント)と、ユーザの評価するポイントは違う

初期の開発経過

- ・ 1994 年、III が個人向けネットワークサービスを開始
- ・ 石岡氏、それに飛びつく
- ・ しかしながら、当時 Windows 用メーラとしては英語版「Eudora」「AL-Mail」「Win-Biff」くらいしかなく、どれも使いにくいことを実感(「ヘルプを読む気もしない」)
- ・ しばらくは Eudora のコードを変換して使う
- ・ 1995 年春(4 月頃)「自分で作っちゃえ」と思う(「自分が使いやすい Windows 版メーラ」が欲しかったため)
- ・ 夜と土日を開発にあてる
- ・ 1995 年 7 月 or 8 月、ソフトウェアが使える状態になる
- ・ 1995 年 9 月 or 10 月、ソフトウェアが安定したと感じ、Asahi ネットのソフトウェア掲示板に投稿
- ・ 「センスがよい」と賞賛され「調子づいてどんどん改良」
- ・ その後、石岡氏自身の願望、メールによる反応、会社の同僚の反応を受け入れ、それに応えるために開発を継続(会社では自分の所属する部署の同僚には、自ら配布していた)
- ・ ユーザからのメールの中には、組み込み可能な APOP や MD5 のソースコードを添付してきたメールもあった
- ・ 「当時は素直に言われることを聞いていた」
- ・ そこには「要望・期待に応えたい」という気持ちがあり、それが開発継続を支えていたのだと思う
- ・ 「出来ますか」と問われると「できるわい」と思ってしまう
- ・ 1 ヶ月に複数回バージョン・アップを行う
- ・ 作業としては、コードを記述し、コンパイルができれば即時公開

詳細は添付テキストの「更新履歴」参照

- ・ デバッグもテストも行わずに公開していたことへの反省から、1996年夏頃には、リリース版と開発室版(いわゆるベータ版)を分けて公開するようになる
- ・ 16bit から 32bit への転換にはかなり手こずった記憶がある
- ・ 開発言語は一貫して Visual C++
- ・ その後も、ユーザから寄せられる要望の量は不変
- ・ ある時期まではそれに応えようと頑張ったが、「自分で使うには十分」と思い、かつ「Becky!」のシェアが急速に伸びてきた 1998 年頃には徐々にバージョン・アップ頻度が下がる
- ・ 「お金も儲からなさそうだし...」
- ・ 2 ヶ月に 1 回程度、石岡氏が「なるほど」と納得するような要望や、深刻なバグに対処するのみ
- ・ 応えられない要望が溜まり、苦痛になる
- ・ 中村氏に連絡を取り、条件つきでソースコード公開に踏み切る

「電八倶楽部」「電八開発倶楽部」への開発移管の経緯

- ・ 随分前から、川瀬氏よりソースコード公開の要望があった
- ・ 川瀬氏と会い、話し合うがソースコード公開には踏み切らず
- ・ 電八倶楽部のメーリング・リストに参加はするが、メールは読まない状態が続く
- ・ 1998 年頃には開発継続の意欲も低下し、ユーザから寄せられるメール(要望)、メーリング・リストを見ることすらなくなる(「事実上の停止状態」)
- ・ 1999 年 7 月、「ふと思い立ち」電八倶楽部のページを閲覧して、その熱心さ(熱心なユーザと熱心な運営者の存在)を感じる
- ・ 中村氏に連絡をとる
- ・ 1999 年 7 月 13 日、条件つきでソースコードを川瀬氏に送付(公開) = 開発を移管
- ・ 「要望が多数あり、熱心なユーザが多くいるのに、ソースコードを死蔵しているのは悪いなあ」

開発移管の詳細に関しては、電八倶楽部 HP の「移管の歩み」参照

石岡氏にとっての開発継続の動機

- ・ ユーザの期待に応えたい
- ・ 公開して満足感を得る
- ・ 配布サイトでの評価、評価記事、ダウンロード数の多さなど
- ・ うれしさを感じたり、誇らしい気持ちになったりし、それが励みになっていた
- ・ とくに「窓の杜」でダウンロード・ランキングのトップになったときはすごくうれしかった

「窓の杜」は、立ち上げ当初はソフトウェア制作者からの掲載要望を受け付けるだけだったが、ある時点からソフトを評価し、格付けするサイトが変わり、さらに「Becky!」に肩入れし始めた時には、正直アタマにきた

「電八倶楽部」の成り立ち

- ・ 1995 年暮～1996 年初頭には、石岡氏自身も(ユーザからの同じような質問に答えなくて済むように)掲示板を立てていた
- ・ それとは別個に、ユーザ側が独自でメーリング・リストを立ち上げ、メーリング・リストが要望提示 = 受付の窓口になる
- ・ これが後の電八倶楽部である

- ・ ソフトウェアの規模は 10 万行以下、5 万行程度

外部ソフトウェアとのインターフェースに関して

- ・ 当初からメールの編集機能は外部のソフトウェアに任せることにしていた(エディタ・フリー)
- ・ 当初エディタを熱心に作成していた人たちの要望を受け入れ、1995～1996 年頃に DDE を作成・公開
- ・ その後、コマンド・オプションも公開
- ・ 現在、電八倶楽部では、フォルダ構造の公開を行うか否かを検討中
- ・ したがって現段階では「電信八号」の外部ソフトウェアとのインターフェースは、DDE とコマンド・オプションのみ
- ・ そうしたインターフェースに則らずに「電信八号」の機能を高めようとするソフトウェアも開発される(例えば、山田氏による「電極八号計画」「電極化プロジェクト」)
- ・ 機能追加(標準メニューへのメニュー項目の追加、ログ拡張、時刻合わせ、PGP プラグインなど)をするソフトウェア

「電信八号++」...ウィンドウ・クラスで「電信八号」を乗っ取り、無理やり「電信八号」を操作するという機能を有する

「電極 Z 号」...「遊び心 80%、実用性 20%」のソフトウェア

「返信八号」

「最新八号」...中村氏作成。電信八号の自動アップ・データ(Windows Update のマネ)

< 以下、中村氏・伊澤氏もインタビューに合流 >

- ・ 最近はおよそ 1 ヶ月に 1 回のペースでビルドを行っている
- ・ 中村氏が多忙なためおもに福井氏が担当

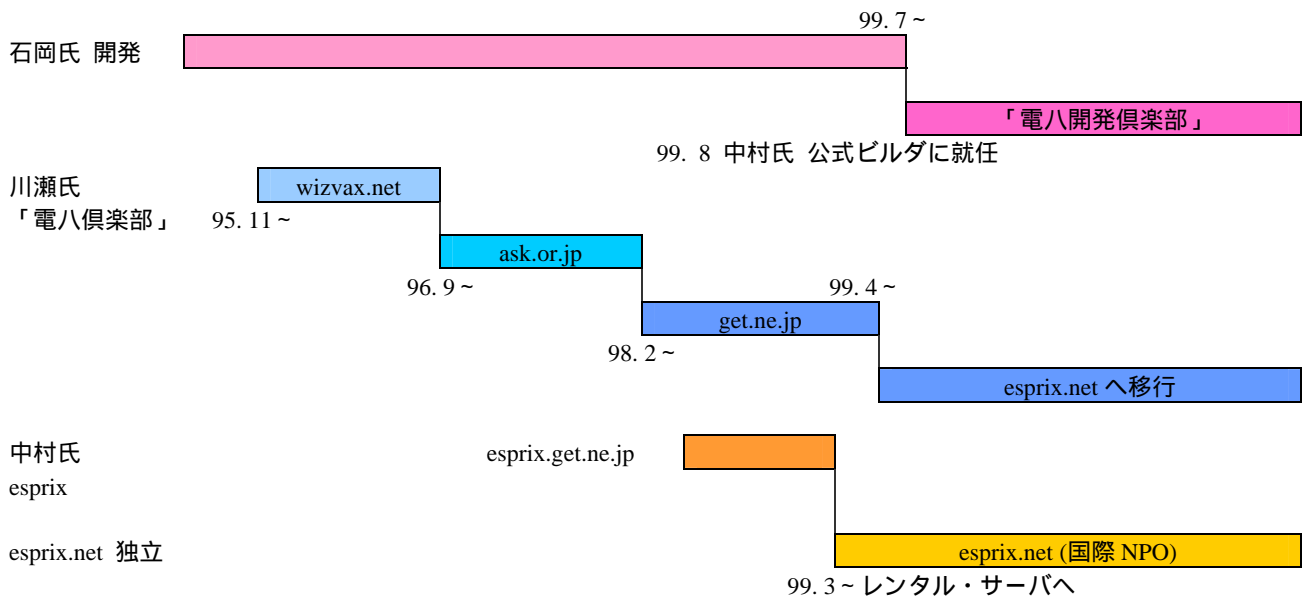
- ・ 上記の「電極 Z 号」のようにソースコード公開以前から「電信八号」の改良ソフトは存在していた

- ・ ユーザ側に「『電信八号』をもっとよくしたい」欲求があった(例えば、「『電信八号』を無理やり良くするメーリング・リスト」なども立ち上がっていた)
- ・ 1999年7月、前述の経緯を経てソースコードが公開される
- ・ (後の)電八開発倶楽部内で「これからどうするか」という議論が行われる
- ・ 石岡氏のソースコード公開の条件(「電信八号」を複数の系統に分裂させない)を守るため「公式ビルダ」を決めて、バージョン管理をすることにする
- ・ 斉藤氏が公式ビルダの仕事を明文化(ソースコード管理、ビルド管理、サイト管理)
- ・ 斉藤氏が会社を活用して公式ビルダの任を負おうとするが断念(青木氏は当初から「公式ビルダは企業より個人の方が良い」と提案していた)
- ・ 1998年8月21日、中村氏が機材を購入したのを機に、公式ビルダに立候補
- ・ 中村氏が公式ビルダになる

「電八倶楽部」の成り立ちと性格について(続)

- ・ 1995年に立ち上げ
- ・ 1996年の時点で約40人の参加
- ・ 誰でも入れて、いつでも抜けられるメーリング・リスト

「電八倶楽部」設立までの流れ



- ・ get.ne.jp ドメインが売却されるのではないかと懸念から、esprix が独立する
- ・ get.ne.jp 内にあったメーリング・リストも esprix へ移管
- ・ ソースコードの公開にともなって「電八開発倶楽部」設立
- ・ 石岡氏がソースコード公開に際して提示した条件の中の重要課題 = (配布用の)サーバの確保
- ・ 現在の「電信八号」、電八開発倶楽部にとって「Becky!」は「よきライバル」

- ・ 公式ビルダの中村氏...自作、移植ソフト多数
- ・ 現在のソースコード保有者...石岡氏、電八開発倶楽部、のびのび情報教育研究会、他にもう一箇所

「電八倶楽部」

- ・ 元来は、ユーザの情報交換サイト(川瀬氏が勝手に作ってしまったようなもの)
- ・ 設立初期には電八倶楽部から石岡氏へ要望をとりまとめて提出していた
- ・ 石岡氏による開発室版の配布会なども行われるようになる

電八倶楽部の過去の活動状況を知るためには、過去ログを見るのがよい

1995、1996年頃は「たとえコケても最新のものを使いたい」という欲求があった(青木氏)

Window95が発売され、1997年頃からインターネットが本格的に立ち上がった

- ・ ユーザ(兼開発者)からみた「電信八号」の魅力
 - データが分かりやすく配置され、その挙動が分かる
 - ほとんどがテキスト・ファイルで構成されている
 - メール本体がすべてテキスト形式なので、管理・リカバリーが容易(伊澤氏)
 - 使い慣れていた Unix 上の MailHandler(MH)、emacs 上の MH-e に近い操作感覚が、Windows 上で実現されている(中村氏)
 - エディタ・フリーである
- ・ 例えば「電信八号」と連携するビューワやエディタと組み合わせ、「電信八号」本体は常駐させて、ビューワやエディタから「電信八号」を操作する、といった使い方をしている人もいる
- ・ 石岡氏も MH を意識(モデルに)して「電信八号」を開発していた

「電八開発倶楽部」の初期の問題

- ・ 16bit 版バイナリ配布問題
- ・ 中村氏による「電八倶楽部」「電八開発倶楽部」私物化疑惑
- ・ 「電八倶楽部」「電八開発倶楽部」の間の軋轢
- ・ ソースコードの条件つき公開(限定的公開)に不満を持つ人(GNU 派)の発生
- ・ アメリカでは原作者による著作権の放棄が可能のため、ソフトウェアを Public Domain におくことができる
- ・ Public Domain とは、原作者が著作権を放棄した(著作権の消滅した)ソフトウェアをアップロードするためのサイト
- ・ これに対して日本では、原作者による著作権の放棄が不可能のため、Public Domain の作成は不可能であり、フリーウェア、シェアウェアといった形態で公開・配布されるソフトウェアが存

在する

- ・ 日本国内では、日本国著作権法に従わなくてはならない
- ・ ソースコードを無条件に公開すると、ソフトウェアのバージョンが複数に分岐し、同一ソフトウェアにも関わらず、バージョン間の互換性が取れなくなる恐れがある(例えば「LH-arc」)
- ・ 「電信八号」の場合には「電信八号」という言葉への愛着(ただし、過去の失敗事例などは知らず)のため、一時期プライベート・ビルドが乱立した時期があったものの、現在は公式ビルドに一本化することに成功している
- ・ 自由にやってもよいと言われて(ソースコードが無条件で公開されて)いたら分裂していた可能性は大きい
- ・ 「電信八号」の公式ビルドを維持することは、中村氏にとって自己実現であり、「どうしても止めることができない」ことである(フリーソフトは自己実現の発露の一つである)
- ・ 福井氏...現公式ビルダ(プライマリ)。中村氏のビルドをサポートする形でビルドに参加
- ・ 現在、関西・中部など国内の他、イスラエルなどの外国にもユーザがおり、メールが届く
- ・ 「世界中から応援を受けている感じ」(中村氏)

現開発者、メーリング・リスト参加者のモチベーション

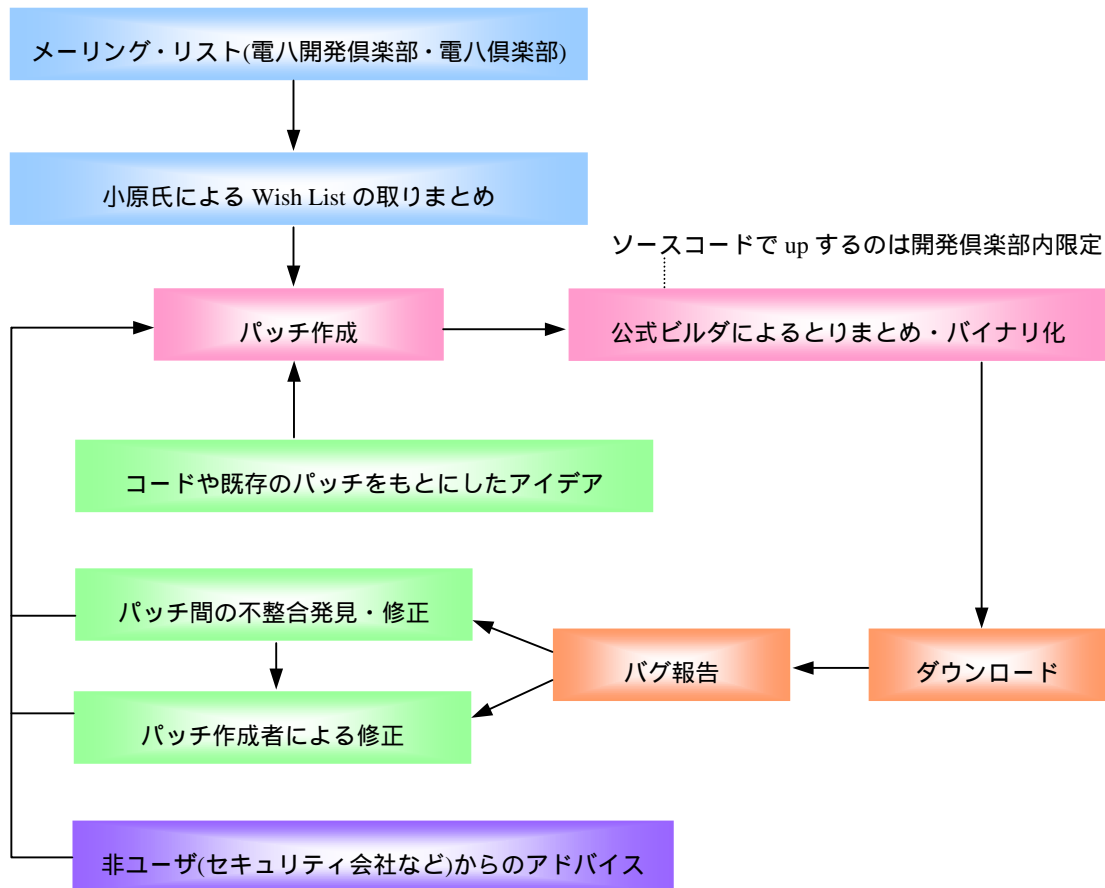
- ・ 中村氏
 - 誇り(使っていること、作っていること、参加していること自体に)。生きがい 1日3時間ほど開発
 - さらに、ユーザたちに貢献することができている、役に立っているという実感がある
 - 「電信八号」、電八倶楽部への愛着を持つ人たちのために開発をしている
 - 「石岡氏の人柄が滲み出ている」メーラ、「電信八号」は「職人の道具」のようなソフトウェアだと思う
 - プロセッサが486系でも軽快に動くメーラとして優れている
- ・ 青木氏
 - 現実逃避。困った人を助けてあげることによる満足感
- ・ 伊澤氏
 - 1997年から使い続けている「ないと困る道具だから」連絡係を引き受けている
 - コミュニティの動きを見ているのも面白い

中村氏は UNIX 文化 = 「プログラムはソースコードで配布するのが普通」になじんでいるので、ソースコードが公開されている「電信八号」を好んでいる

- ・ 「電信八号」の開発のスピードは基本的に非常に速い
- ・ ただし、最初の公式ビルドは、提出済のパッチが多かったため、公開が遅れた
- ・ 福井氏が非常に多数のパッチをまとめてくれたため、最初の公式ビルドが公開できた

- ・ その後は、福井氏と中村氏がほぼ交代で、3日~6ヶ月毎に公式ビルドを公開している
- ・ 公式ビルダの違い
 中村氏...完璧主義
 福井氏...「アバウト」=「多少不完全であっても公開して良いだろう。問題が生じたら後から修正すれば良い」
- ・ 「電信八号」における開発には、ユーザ(メーリング・リスト参加者)の中に優秀なデバッガ(=バグ出し可能な人材)がいることも寄与している
- ・ 修正項目をすべてテストしてくれたり、再現条件まで克明に記したレポートをつけてくれたりする人もいる

パッチ作成・ビルドのプロセス



詳細については電八倶楽部 HP の「パッチリスト」を参照のこと

- ・ 公式ビルダの1人である小原氏が Wish List を取りまとめ、これを1つずつ消化していく中でパッチができあがってくる
- ・ ユーザが自分で使っていく中から問題解決として、あるいは、石岡氏のコードを見ていて、技術的に解決するかたちでパッチが上がってくることもある
- ・ また、RFC などの規格変化に対応してパッチを作成することもある

- ・ こうして作成されたパッチをバイナリ形式でサーバに up する(倶楽部内限定、ただし URL を知っていればダウンロード可能。また、ソースコードでの up は開発倶楽部内限定)
- ・ 動作が不安定になる可能性があるときは 版(データ消失の危険あり)として、大丈夫だと思われるときは 版として up する
- ・ バグ報告はメーリング・リストで行われ、これを受けて正式版がリリースされる
- ・ バグ報告だけでなく、すぐにパッチを作成して up してくれる人もいる
- ・ 電八倶楽部内で再現条件をつめていくプロセスがまずある
- ・ セキュリティ・ホールを探して報告してくれる会社もあり、そこからレポートが送られてくることもある
- ・ 公式ビルダ 2 人体制をとっていることは、分裂の危険性をはらんではいないが、助けられることが多々ある(相互補完)
- ・ なお、公式ビルダとは 版の作成に関わる人
- ・ 「趣味」で開発を進めているので、公式ビルドの公開が遅れがち、滞りがちになることがある
- ・ 公式ビルドの公開時期を事前に決めておく事もある(ex. 「クリスマス・ビルド」)
- ・ 公式ビルダ...4 名：福井氏、中村氏、小原氏(Wish List 担当)、川瀬氏(最終公式ビルダ；裁定者)
- ・ 連絡・渉外担当...伊澤氏(中村氏に作業が集中しすぎると問題だから担当)、小川氏、近田氏
- ・ den8-contacts...公式ビルダと連絡・渉外担当者の「業務連絡」のためのメーリング・リスト
- ・ メーリング・リストの基盤となる esprix.net は川瀬氏と中村氏で立ち上げ

「電八倶楽部」の活動状況

- ・ 総参加者 1000 人、活動的な(active な)人は常時 40 ~ 50 人
- ・ 「声の大きい人、小さい人」はいる
- ・ 一部を除き、active な人は入れ替わっていると思われる

「電八開発倶楽部」の活動状況

- ・ 総参加者 300 人、active な人は常時 4 ~ 5 人
- ・ やはり、一部を除き active な人は入れ替わっていると思われる

中村氏が「電信八号」の開発(公式ビルド公開)において気をつけていること

- ・ 「電信八号」は、RFC 完全準拠+ (高速性、安全性)のメーラ
- ・ 「電信八号」本体とプラグインの使い分け(切り分け)¹に留意している
- ・ 上記のようなコンセプトもあり、内部的には大分変化しているものの、外見・外部仕様は変化

¹ 藤田による補足。

していない

- ・ それに満足している人と、それが不満な人がいる
- ・ メジャー・バージョン・アップ(「電信八号バージョン2」の開発)も考えてはいるが、リーダーがいないのでそれに踏み切れないでいる
- ・ ただし、Linux のようにもとの開発者がリーダーとなって開発を進めていくのも一長一短では？
- ・ 「電信八号」の場合、リーダー不在、「宙ぶらりん」の状況、「不安定な状況」の中で続いているのがよい面でもあるだろう
- ・ メジャー・バージョン・アップを行う場合、「何が『電信八号』なのか」という定義の問題がある
- ・ 中村氏は(上述のように)、 外見が変わらないこと、 同じソフトが使えること(外部仕様が同じこと)が重要だと考えている
- ・ ただし、中身は大幅な機能アップを実現したい
- ・ フル・スクラッチで作ったら果たして「電信八号」と言えるのか？！
- ・ 開発を進める上でのリーダー、サブ・リーダーはいないが、公式ビルダに「技術的拒否権」(= 当該パッチを採用すると不具合が生じるのでビルドに統合しない)は与えられている
- ・ 「電信八号」の開発の進め方のモデルは、BSD にあると考えている(中村氏)
- ・ オンライン・ソフトウェアの中でも「フリーウェア」が日本では数多く見受けられるが、こうしたタイプのソフトウェアが生まれてくる背景に、国内では Public Domain が成立しないことや、GPL に即したソフトウェアの開発が日本ではまだ浸透していないことがあると思われる(中村氏)
- ・ したがって、日本ではいわゆるフリー・ソフトウェア(無償オープンソース)は存在せず、「ユーザー・サポーター・ソフトウェア」と名づけられるべき形態で開発が進められてきた
- ・ こうしたユーザー・サポーター・ソフトウェアが、あるものはソースコードの条件付き公開を行い、フリーウェア、シェアウェアと呼ばれる種類のソフトウェアに分かれていったという歴史的経緯がある

石岡氏にとってのフリーウェアの定義 = 無料のソフト

- ・ FTP サーバに up するときや雑誌付録の CD-ROM などに収録するときに知らせてもらうのは、どういうところで使われているか知りたいから

「電八開発倶楽部」「電八倶楽部」のオフラインでの交流

- ・ 一部の例外を除き、ほぼないと言ってよい
- ・ 一度、小学館からムックを出版したことがあり、その原稿校正で顔を合わせたことがある

- ・ 「一度集まってみたい」という欲求はあるが、チャンスがない
- ・ 今回のインタビュー調査で集まったのが実は2度目である